

# 3組の母娘関係の時系列的な研究

Time Series Study of Day-to-Day Interactional Relationships between Mothers and Adolescent Daughters

— Multi-group Simultaneous Analysis of Three Pairs —

太成学院大学 小高 恵

1

## 問題

青年期 (adolescence) とはどのような時期なのか？

青年期は親子関係の転換の時期

心理的離乳

(*Psychological weaning* (Hollingwoth, 1928))

第二の個性化

the second individuation process (Blos, 1967)

個性化モデル

individuation process model (Grotevant, 1986)

独自性  
(individuality)

結合性  
(connectedness)

2

- 「**独自性**」の下位概念
  - 「**自己主張**(self-assertion)」: 自分自身の視点を持ち, それをはつきりと伝えることの責任を自覚する
  - 「**分離**(separateness)」: 自分と他の家族成員との間の見解の違いを述べる能力
- 「**結合性**」の下位概念
  - 「**相互性**(mutuality)」: 他者の信念や感情に対する感受性を示し, それを尊重すること
  - 「**滲透性**(permeability)」: 他者の考えに対する応答性あるいは開放性である。

3

親子関係の基本次元は？

受容—拒否

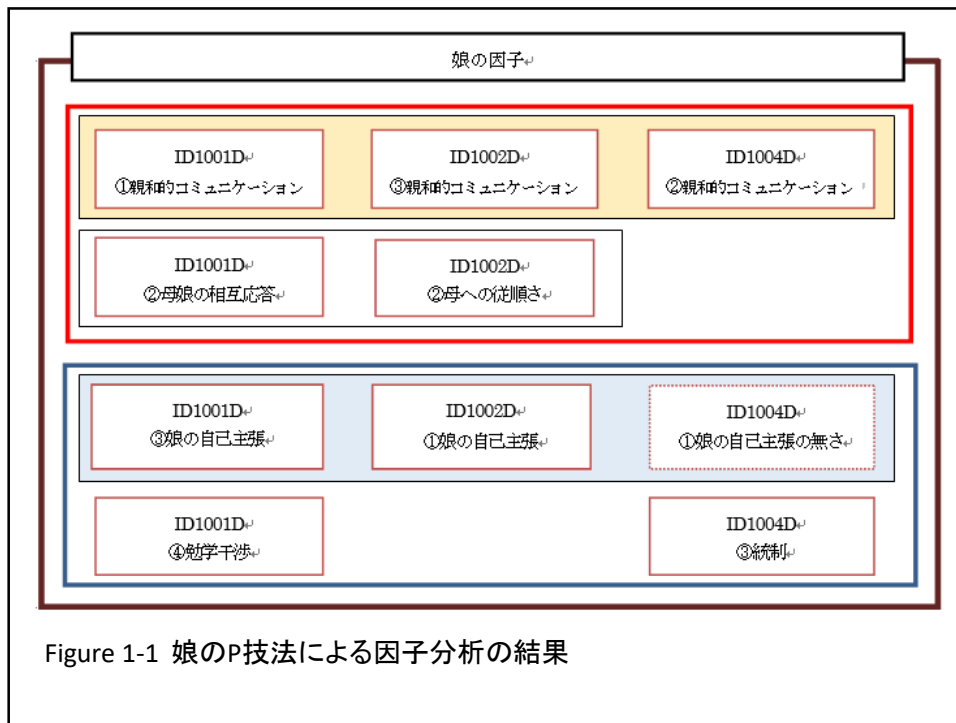
支配—服従

日々の親子関係の基本次元は？(小高・紺田, 2018)

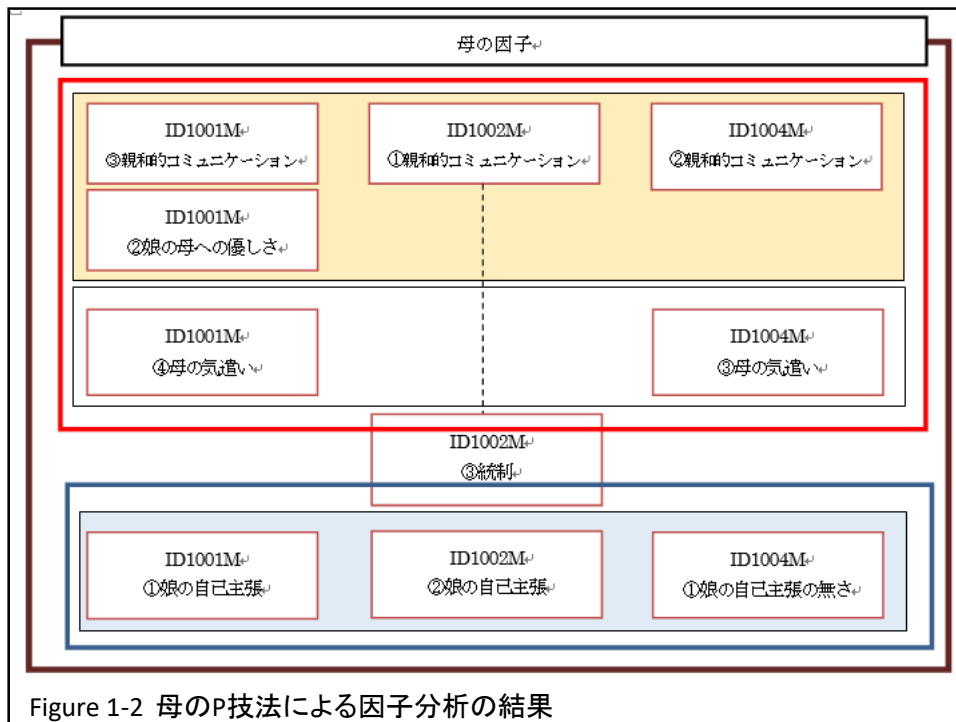
母娘の親和的コミュニケーション

娘の自己主張

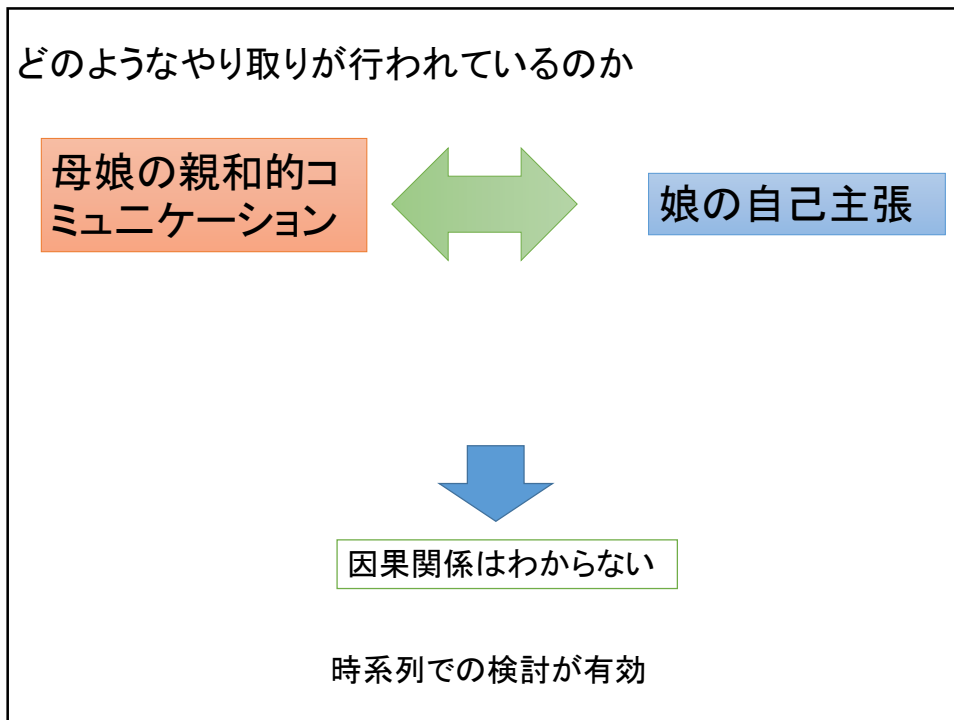
4



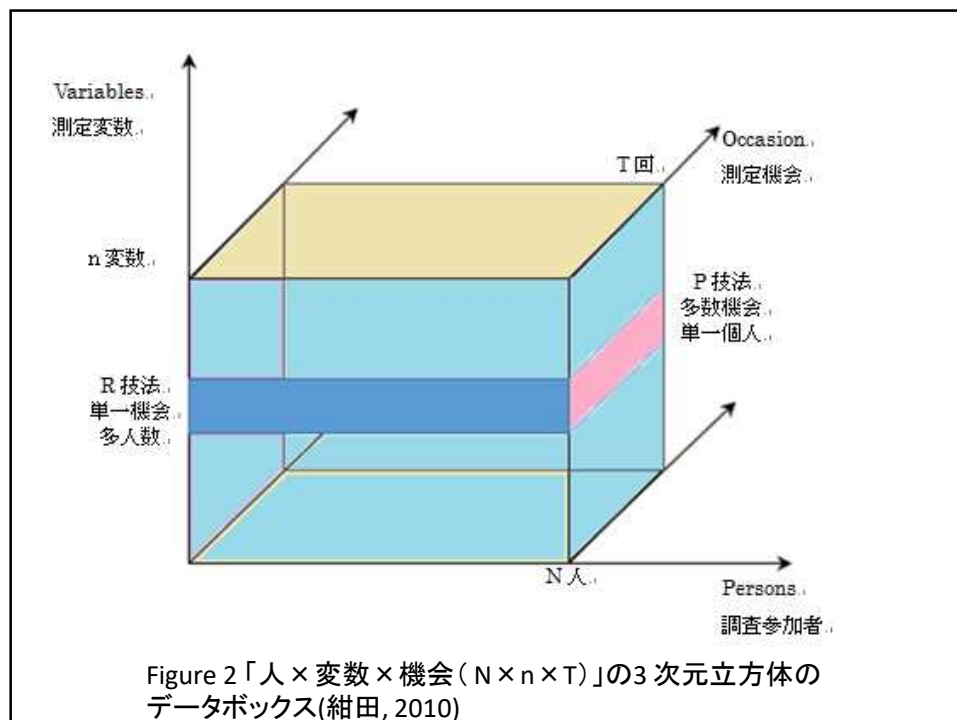
5



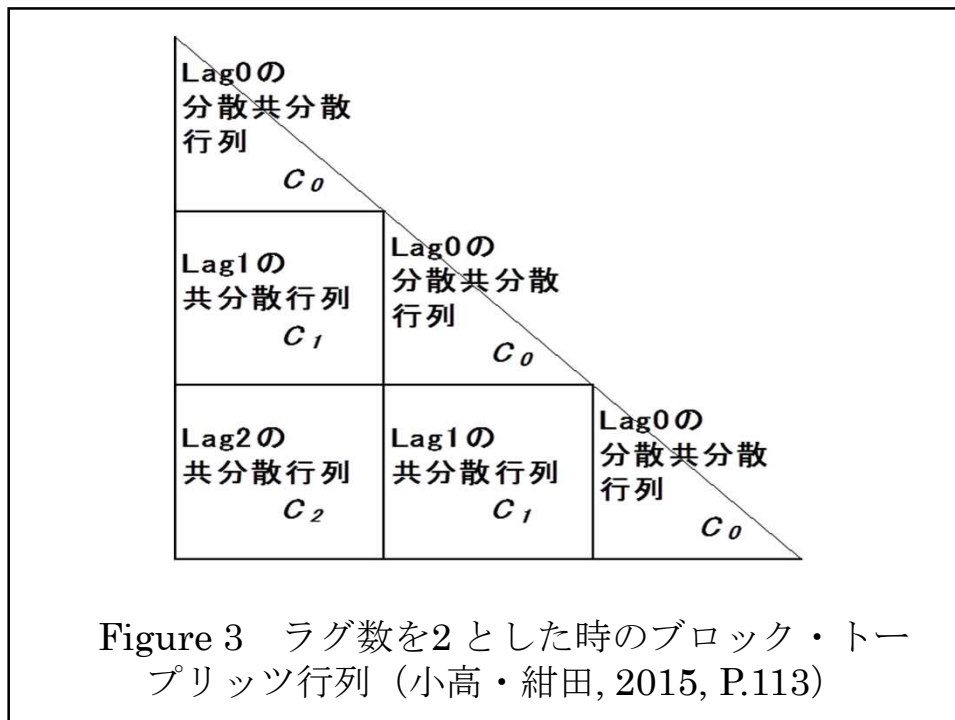
6



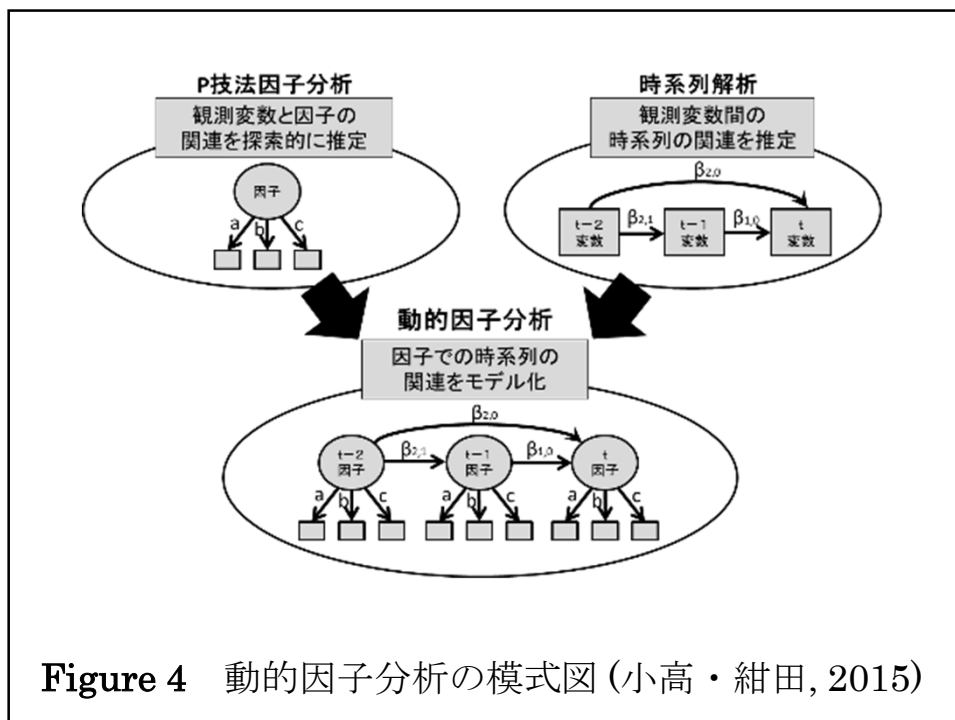
7



8



9



10

## 方法

### 分析対象者と測定期間

対象ペア	ID1001		ID1002		ID1004	
	娘	母	娘	母	娘	母
年齢	12	45	13	43	12	43
日数	145		101		144	

### 分析対象項目 小高・紺田(2017a, 2017b)

母娘

母娘の親和的コミュニケーション(5項目)

娘の自己主張(4項目)

11

Table 1 本分析で使用した項目一覧

回答者	因子	小包	項目番号	項目
娘の回答	コミュニケーション 母娘の親和的	娘_親和1	DA01	お母さんに色々相談した
		娘_親和1	DA17	お母さんは、私に色々気をつけてくれた
		娘_親和2	DA02	お母さんの言うことはその通りだと思った
		娘_親和2	DA16	お母さんは、私を励ましてくれた
		娘_親和2	DA18	お母さんは、私の喜びそうなことをしてくれた
	娘の自己主張	娘_主張1	DA08	お母さんと言ひ合いになった
		娘_主張1	DA10	お母さんは口うるさいと感じた
		娘_主張2	DA09	お母さんの言動で納得できないことがあった
		娘_主張2	DA13	お母さんに口答えした
	母の回答	コミュニケーション 母親の親和的	母_親和1	M002
母_親和1			M014	私に対して素直であった
母_親和2			M003	私に感謝の言葉を口にしてくれた
母_親和2			M005	私のことを理解してくれた
母_親和2			M006	私の考えに耳を傾けてくれた
娘の自己主張			母_主張1	M008
		母_主張1	M010	私から干渉されるのを嫌がった
		母_主張2	M009	私に対して、批判的な言動があった
		母_主張2	M013	私に口答えした

12

## 分析手続きと結果

### (1) 母娘関係の時間経過を入れないラグ0のモデルの作成

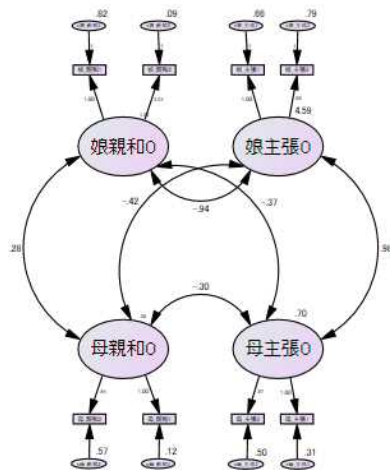


Figure 5 母娘関係のラグ0モデル

( $\chi^2(50)=71.429, p<.05,$   
 RMSEA=.033, CFI=.983,  
 AIC= 187.429,  
 SRMR=.038)

13

- 各小包化した変数の偏自己相関を算出しその有意性を検討した。
- ここで、n 次の偏自己相関とは途中の1期からn-1期までの影響を取り除いた後の相関係数のことである。本研究での偏自己相関係数の有意性検定を行った結果、ラグ1では24変数(8変数×3組)の内19変数が有意であり、ラグ2では3変数が有意であった。
- 3組に共通した影響力はラグ1であると考え、ラグ数を1と定め動的因子分析を行うことにした。

14

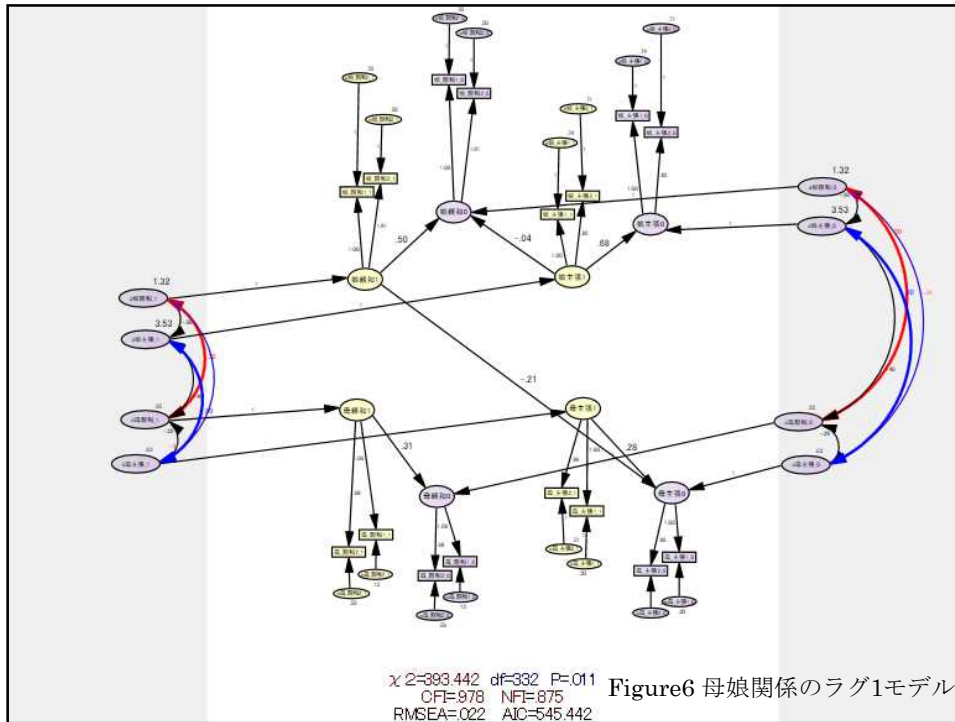


Figure6 母娘関係のラグ1モデル

15

## (2)時間経過を入れたラグ1モデル

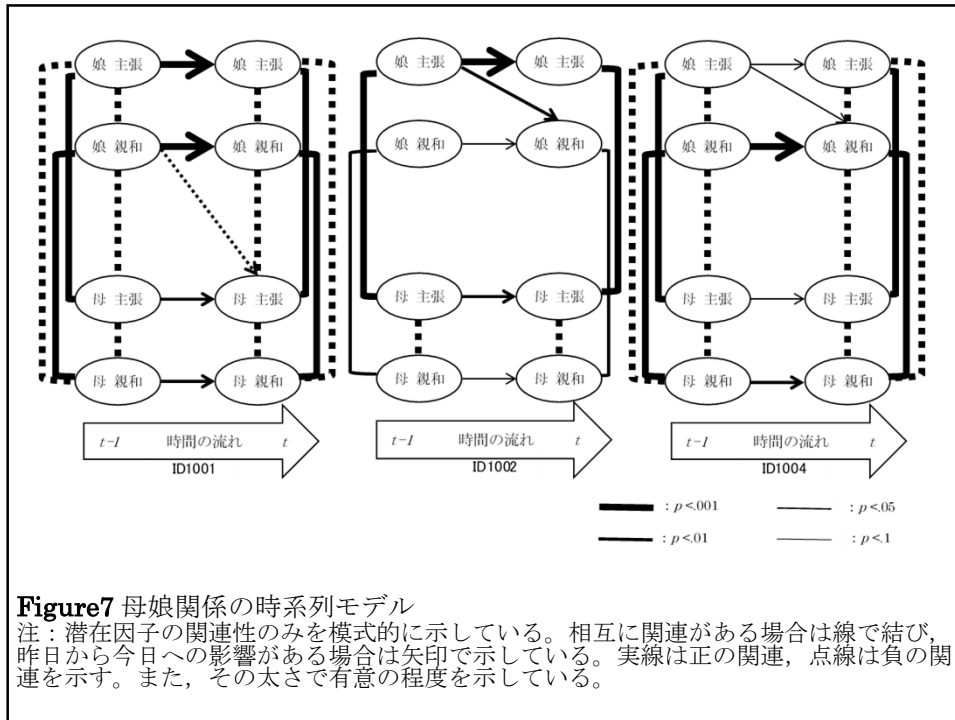
Table2 母娘関係モデルの推定値

			ID1001				ID1002				ID1004			
			推定値	標準誤差	標準化推定値	p	推定値	標準誤差	標準化推定値	p	推定値	標準誤差	標準化推定値	p
測定モデル	ラグ1	娘親和0 <--- 娘親和1	0.502	0.095	0.443	***	0.486	0.290	0.396	†	0.666	0.119	0.562	***
		娘主張0 <--- 娘主張1	0.682	0.088	0.563	***	0.389	0.114	0.362	***	0.146	0.084	0.145	†
		娘親和0 <--- 娘主張1	-0.038	0.059	-0.055	n.s.	0.189	0.059	0.505	**	0.151	0.067	0.207	*
		母親和0 <--- 母親和1	0.314	0.106	0.300	**	0.327	0.126	0.311	*	0.256	0.082	0.248	**
		母主張0 <--- 母主張1	0.276	0.103	0.250	**	0.318	0.109	0.302	**	0.165	0.088	0.162	†
		母主張0 <--- 娘親和1	-0.207	0.064	-0.272	**	-0.083	0.248	-0.047	n.s.	-0.144	0.104	-0.101	n.s.
測定モデル	ラグ0	娘親和1.0 <--- 娘親和0	1.000		0.841		1.000		0.429		1.000		0.717	
		娘親和2.0 <--- 娘親和0	1.815	0.108	0.958	***	1.815	0.108	0.657	***	1.815	0.108	0.916	***
		娘主張1.0 <--- 娘主張0	1.000		0.935		1.000		0.892		1.000		0.898	
		娘主張2.0 <--- 娘主張0	0.918	0.035	0.927	***	0.918	0.035	0.847	***	0.918	0.035	0.836	***
		母親和1.0 <--- 母親和0	1.000		0.859		1.000		0.856		1.000		0.945	
		母親和2.0 <--- 母親和0	0.688	0.050	0.491	***	0.688	0.050	0.615	***	0.688	0.050	0.691	***
		母主張1.0 <--- 母主張0	1.000		0.848		1.000		0.893		1.000		0.868	
		母主張2.0 <--- 母主張0	0.963	0.048	0.764	***	0.963	0.048	0.823	***	0.963	0.048	0.771	***
因子間共分散	ラグ0	d娘親和0 <--> d娘主張0	-0.863	0.158	-0.400	***	-0.303	0.209	-0.182	n.s.	-0.878	0.218	-0.304	***
		d母親和0 <--> d母主張0	-0.279	0.040	-0.600	***	-0.432	0.071	-0.608	***	-2.250	0.245	-0.776	***
		d娘親和0 <--> d母親和0	0.296	0.054	0.438	***	0.153	0.056	0.366	**	0.604	0.153	0.290	***
		d娘親和0 <--> d母主張0	-0.306	0.069	-0.337	**	-0.150	0.107	-0.175	n.s.	-0.771	0.193	-0.311	***
		d娘主張0 <--> d母親和0	-0.399	0.084	-0.362	***	-0.202	0.123	-0.147	n.s.	-1.974	0.257	-0.584	***
		d娘主張0 <--> d母主張0	0.798	0.118	0.537	***	1.083	0.250	0.384	***	3.043	0.343	0.755	***

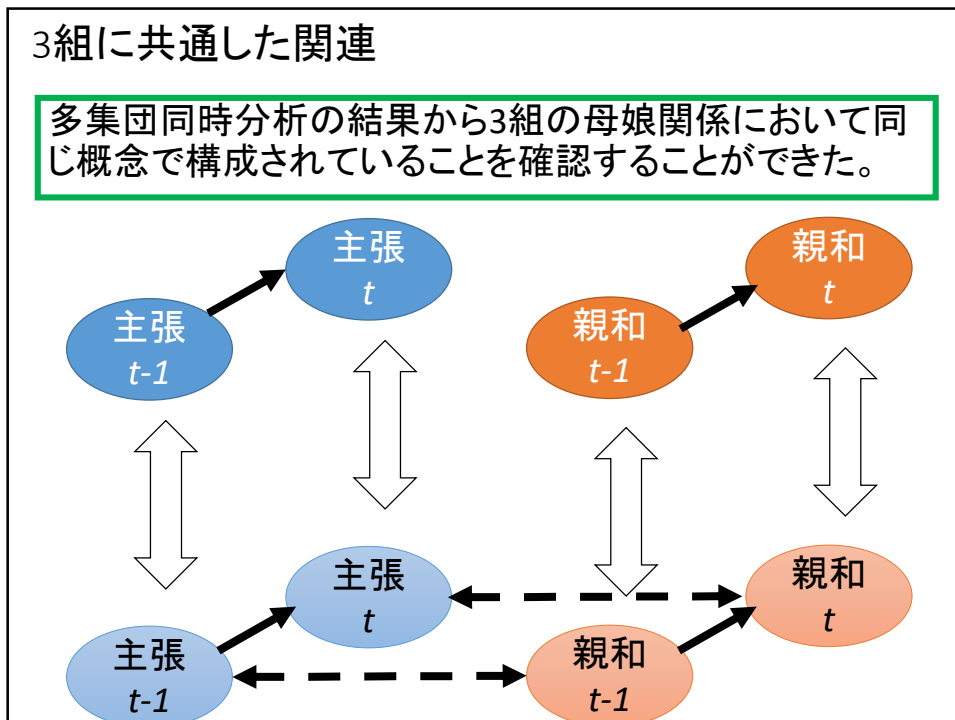
\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001, †p<.1

16





17



18

## 考察

### (1) 親子関係の「自律」と「愛着」からの考察

「自律(autonomy)」：親から離れていく様子を表すものであり，親からの分離を表す概念

娘の自己主張

「愛着(attachment)」：親との結びつきを表すものであり親との情愛的な絆を重視する概念

母娘の親和的コミュニケーション

親子関係の中で「自律」と「愛着」が短い時間の中で現れている可能性がある

19

### (2) 親子関係の「独自性」と「結合性」からの考察

- Cooper et al. は，望ましい心理社会的発達を遂げている青年の親子関係においては，結合性の環境の中で青年が自分自身の独自な見解(独自性)を発達させることが重要であると述べている(平石, 2000)。

青年が独自の見解を述べる背景には結合性を基盤にした情緒的絆が必要



青年期においても母との関係が葛藤に満ちたものであっても次の日は母を求めるといのように，母親が**安全基地**として機能している可能性がある

20

### (3)本研究の意義と今後の課題

母と娘の「親和因子」と「主張因子」の2つの因子が3組の母娘関係に共通した主要な2因子であるという因子の不変性が確認できたこと、また同じ因子で複数の母娘関係を比較し母と娘が双方向に影響しあっている関係が成立していることを確認できた。

法則定立モデルと個別の違いをみていく個性記述的なモデルの両方を明らかにできた。

今後は青年期中期, 後期の関係を検討していく必要がある

21

### 引用文献

- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The psychoanalytic study of the child*, **22**, 162-186.
- Cooper, C. R., Grotevant, H. D., & Condon, S. M. (1983). Individuality and connectedness in the family as a context for adolescent identity formation and role-taking skill. In H. D. Grotevant & C. R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family. New Directions for Child Development* (Vol. **22**, pp.43-59). San Francisco: Jossey-Bass.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R.(1986). Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, **29**, 82-100.
- 平石賢二. (2000). 青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する事例研究. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学*, **47**,281-299.
- Hollingworth, L.S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton.
- 小高 恵・紺田広明. (2015). 中学生の母娘関係の日々の相互作用の一分析: 動的因子分析を適用して. *青年心理学研究*, **26**, 109-128.
- 小高 恵・紺田広明. (2018). 日々の母娘関係のP技法による因子分析的研究 : 3組の中学生の母娘関係の因子構造の比較. *太成学院大学紀要*, **20**, 53-61.

22